



平成28年度
第14回 読書推進プログラム
入賞作品集

目白大学新宿図書館



平成28年度
第14回 読書推進プログラム
入賞作品集

目白大学新宿図書館

もくじ

| | |
|---|----|
| 受賞者一覧 | 1 |
| 館長講評 | 2 |
| 受賞作品 | |
| 一等 見えないものを考えて生きていく。 鳴戸 陽加（中国語学科2年） | 4 |
| 二等 ミルクティーと混沌 市原 稚菜（中国語学科2年） | 6 |
| 二等 病から知った愛 野村 菜月（ビジネス社会学科1年） | 8 |
| 佳作 その君、今こそ大いに悩もう 高橋 優菜（メディア表現学科4年） | 10 |
| 佳作 桐島が与える影響と変化 櫻井 舞（メディア表現学科4年） | 13 |
| 佳作 夢を叶えるための秘訣とは… 吉村 友里乃（日本語・日本語教育学科3年） | 15 |

受賞者一覧

【一等】

中国語学科 2年

鳴戸 陽加

【二等】

中国語学科 2年

市原 稚菜

ビジネス社会学科 1年

野村 菜月

【佳作】

メディア表現学科 4年

高橋 優菜

メディア表現学科 4年

櫻井 舞

日本語・日本語教育学科 3年

吉村 友里乃

【参加賞（応募受付順）】

斎藤 理沙（心理カウンセリング学科3年）

佐藤 駿（日本語・日本語教育学科1年）

石島 彰泰（心理カウンセリング学科3年）

永嶋 麻里奈（日本語・日本語教育学科3年）

関口 綺香（心理カウンセリング学科3年）

池田 颯（メディア表現学科4年）

赤星 ひかる（心理カウンセリング学科3年）

金子 美咲（日本語・日本語教育学科3年）

藤井 成美（心理カウンセリング学科3年）

込貝 美優華（社会情報学科1年）

森瀬 隼人（メディア表現学科4年）

川森 郁弥（メディア表現学科4年）

小島 信宏（児童教育学科2年）

上村 知己（メディア表現学科4年）

柳瀬 祐樹（心理カウンセリング学科3年）

雑賀 美佑（心理カウンセリング学科3年）

鈴木 武史（心理カウンセリング学科3年）

濱野 智貴（日本語・日本語教育学科3年）

王 一南（言語文化研究科1年）

橋本 美穂（メディア表現学科4年）

畠山 翔伍（メディア表現学科4年）

渡邊 一美（心理カウンセリング学科3年）

大森 翔太（日本語・日本語教育学科3年）

高橋 幸佑（日本語・日本語教育学科3年）

鞠子 拓治（日本語・日本語教育学科3年）

高松 沙帆（心理カウンセリング学科3年）

韓 ユン恵（日本語・日本語教育学科3年）

野口 大史（心理カウンセリング学科3年）

矢谷 碧（心理カウンセリング学科3年）

飯野 沙耶香（心理カウンセリング学科3年）

櫻林 純己（心理カウンセリング学科3年）

成田 茜（心理カウンセリング学科3年）

【特別賞】 該当者なし

館長講評

平成29年2月3日

各賞に入賞された皆さんにまずはお祝いの言葉を申し上げたいと思います。おめでとうございます。今回の読書推進プログラムは大激戦でした。昨年度の応募者は14名でしたが、今年度はその3倍弱にあたる38名の応募がありました。内訳は大学院生1名、大学生36名、短大生1名です。主催する側としては大変驚くとともに、嬉しく思っています。すべてを調べたわけではありませんが、大学院、大学、短期大学部と3つの学校種がそろったのは珍しいことではないでしょうか。幅広い学生の皆さんが本を読み、またその本を読んだ後に感じたことをまとめてくれたことになります。ここまで一所懸命に取り組んでくれた学生の皆さんと、熱心に指導してくださった先生方に御礼を申し上げたいと思います。

読書の対象となった本は「目白の100冊+α」の中から選ばれたものですが、今回は全部で26冊となりました。4人が選択した本が1冊あり、これが最も多くて、一人しか選択しなかった本が18冊ありましたので、そんなに重ならなかったのもよかったですと思います。若いときには領域をあまり限定せずになんでも読んでみるという姿勢が大事ですので、学生の皆さんにはあまり関心を狭めずに、幅広く読んでほしいと思います。

これらの作品について、図書委員の先生方が分担して読み、評価をしてくださいました。数字での評価だけでなく、全員の先生方がそれぞれの作品についてコメントもしてくださいました。忙しい時間を割いて作品を読み、丁寧に評価してくださった図書委員の先生方にも御礼申し上げます。そんな先生方からのコメントも含めて、各作品についてご紹介いたします。

1等の鳴門さんの「見えないものを考えて生きていく」は、「若者の感じる若者論」として秀逸のものでした。大人から見た若者論に対して自らを振り返り、「ふわふわ」や「ぐちゃぐちゃ」という擬態語を巧みに使っていて、アイデンティティ形成論としてもとても興味深い先品でした。「最終的にきちんと自身そのものの問いに返っている」というコメントがありましたが、観念的な一般論にならなかったのもよかったですと思います。

2等の市原さんの「ミルクティーと混沌」は、一見不可思議なタイトルですが、読み進めるうちにインドのガンジス河を表しているとわかって、魅力的ないいタイトルだと思いました。河、水、宗教、女神、聖なるものといった言葉から想像される深遠な世界を、精一杯努力しながら論じてくれました。「評者自身の姿がほとんど映し出

されてきていない」とのコメントもありましたが、それが今後のチャレンジの方向性かもしれません。

もう1人の2等野村さんの「病から知った愛」は、主人公つぐみの心情を自分の祖父母のことと重ね合わせて論じていたので、とても実感あふれたものとなり、死と生に関するその思いがよく伝わりました。登場人物に見る人間の心の複雑さ、人生の不条理のようなものも読み手によく感じさせてくれました。ただ、「死を強調しすぎている」という指摘もありましたので、さらに視野を広げていけたらいいと思います。

佳作の吉村さんの「夢をかなえるための秘訣とは…」では、自分を変えるために「意識を変えること」と「感謝すること」が大事であることを具体的に述べ、先に進もうとしている自分のあり方がよく伝わってきました。この本の面白さが、登場人物の奇抜さや語り口によるところだということもよくわかりましたが、「多くを学んだ」などと抽象的に述べているところが残念というコメントもありました。

同じく佳作の高橋さんの「その君、今こそ大いに悩もう」は、つい手に取ってみたくなるような、とても刺激的なタイトルでした。就活や卒論で悩んでいる時期にぴったりの本であったと思いますし、働くことの意義が自分なりにわかったり、きちんと悩むことが大事だということに気づくことができよかったです。「本書のメッセージを整理し、それが自分にどのように作用したかがわかる秀作」だというコメントがありました。

佳作の櫻井さん「桐島が与える影響と変化」は、桐島という男子生徒が部活をやめることで、周囲にどんどん波紋を広げていく様子がわかりやすく書かれています。またその中の1人に自分を重ねて、その人物と比較しながらこれまでの自分のあり方に考えをめぐらしており、そこに実感がこもっていました。ただ、「あらすじが中心」とのコメントもあり、バランスの取り方が難しかったかもしれません。

近年若者の活字離れが進み、まともに本を読んでいる大学生が多くなっているとの話を聞きます。SNSで短い文を書く機会は増えましたが、長い文章を読んだり、書いたりする機会は確かに減ってきました。そんな時代の中ですが、今回38名もの応募があり、上位に入賞した人たちの作品はどれも読み応えのあるものでした。読んで理解する、考えたり感じたことを表現するという能力は、私たち人間だけが持っているとても貴重な能力です。これを眠らせていては大変もったいないことです。ぜひ、今後も本を読み、感じたことを発信して行ってほしいと思います。

目白大学新宿図書館長 沢崎 達夫

見えないものを考えて生きていく。

中国語学科 2年
鳴戸 陽加

私は現在 20 歳。世間でいう「若者」である。「若者」の私は、大好きな中国語を大学で学んで 2 年が経つが、ニュースを見ている時やふとした時に「私は今、本当に幸せなのだろうか？」と考えることがある。確かに好きなことはできているけれど、そのために頑張っていてバイトもして、勉強と仕事の両立に苦しんでいるからだ。この大変な毎日は、果たして「幸せ」というものなのだろうか。そういえばニュースでも、日本の将来を支えるはずの今の若者には、今もこれからもいろいろな負担がかかるだろうと、不安な話を伝えている。もしかして大人の目に「若者」の私たちは、「不幸」と映っているのだろうか。

私は幸せなのか不幸なのか。なかなか答えが出ないでいる時、「目白の百冊」のリストに本書があり、書名に惹かれて読むことにした。「国は絶望的だが若者は幸福だ」と著者が言い切っていることに興味を持った。この本を読めば、もしかしたら私の問いにも答えが出るかもしれない。

読み進めると、確かに本の中には答えがでていた。内閣府の「国民生活に関する世論調査」によると、2010 年に 20 代の 71% が生活に「満足」と答え、幸福度は 40 年間の中で一番高いというのだ。私は驚愕した。日本の「若者」は今の生活に満足し、「幸福」だったのだ。

しかし調査に答えた若者たちの満足感や幸福感とは、「必要なものがすぐに手に入る」という点について答えたにすぎないのではないか、という疑問も生まれた。たしかに今の日本の生活は、何か必要であればすぐ手に入るし困ることはないが、それは本当の意味の満足ではないと思う。SNS を使って日々の不満を呟いている人々は満足で幸せだと言えるのだろうか。

本書によると、現在のこうした若者像をあらわすときに、「内向き志向」という見方があるという。昨今の若者は安全で確実な道を選ぶので、海外には目を向けず、社会にも関心がないというのである。たしかに私自身も将来の日本社会に希望をあまり抱けないので、「内向きな若者」の 1 人にされてしまうかもしれない。

ところが 2011 年の別の調査では「国や社会のことにもっと目をむけるべき」と考える「社会志向」の 20 代の若者が全体の 55% を占めた。これはいわば「外向き志向」ともいうべきもので、70 才以上の高齢者と比べても僅差で高い数字だ。たしかに私も留学を希望しているし、中国語力を活かして国際的な仕事に就きたいとも思っている。筆者の言う「社会志向」の若者の 1 人と数えられるかもしれない。結局私は「内

向き志向」なのか、「外向き志向」なのか。ますますわからなくなってしまった。そもそも私は、大人達の言う「若者らしさ」が何なのかがよくわからない。社会に希望をもち、活発に活動するのが若者らしいというのだろうか。「若者」とは自分たちのことであるはずなのに、このような調査データやグラフで数字を見てしまうと、私はみんなと少し違うのかもしれないと不安になり、心が揺らぐ。強いはずの意志が「ふわふわ」になり、整理されていたはずの頭の中が「ぐちゃぐちゃ」になってしまう。

一方で、この本を読んで面白かったのは、戦後から高度成長期、バブル期など、それぞれの時代の若者に関する調査である。特に1970年代以降の「一億総中流」の時代には、若年層をひとくくりに論じる「若者論」を大人が語るようになったという。こうした「若者論」の本は、大人が読むと今の若者の特徴を手軽に理解できたようで、どこか自分が救われた気になるのかもしれない。つまり「若者論」は大人を救済するのである。本書は著者自身が30代で「若者」に近い世代なのだが、やはりこれも大人に向けた「若者論」であるともいえる。だから筆者よりも若い私が読んでみると、データや数字を用いて「若者とはこういうものだ」と言い切られ、押し付けられている感じがするのだろう。

結局、私も著者も「若者」とはどのようなものかを明確に答えることは不可能なのだ。なぜならそれは日々「ふわふわ」と変わっていくものだから。でも、それで良いと思う。私が思う若者像も、私より年下の若者達とは違う意見だろうし、きっと彼らは私と異なる新しい若者像を作っているのだろう。だから「若者論」は、そんなふわふわと掴みづらいものを形にして示してくれるという点に意味があると思う。

この本を読んで感じたことはたくさんあった。しかし、「今、私は幸せなのだろうか？」という問いに対しての答えはここにはなかった。数字上の答えは見つかったが、本当の答えはない。でもそれは、私が「若者」のまっただなかにいる証拠である、という別の答えにたどりついた。新しい問題を前にすると頭の中が「ぐちゃぐちゃ」になってしまうけれど、それでも何とか答えを出し、心の中の「ふわふわ」を固めようとしていく日々。そのうちにだんだん「自分」というものができ、いつかそれが定まって、気づいたら若者ではなく一人前の大人になっているのではないだろうか。「ぐちゃぐちゃ」や「ふわふわ」は人それぞれで、それはきっと「個性」につながっていくものだと思う。若者は見えない幸せを考えながらこんなふうに過ごし、今を生きているのだ。

古市憲寿 『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社

ミルクティーと混沌

中国語学科 2年
市原 稚菜

本書は、それぞれの人物がさまざまな理由でインドを訪れ、それぞれの答えを探しだしていく物語である。

登場人物はみな、他人には簡単に理解できない深い悩みをもっている。たとえば死んだ妻へ愛情を示すことができなかつた後悔から、転生した妻の行方を捜しに来た男性。誰かを心から愛することができず、学生時代に知り合ったクリスチャンの男の行方を捜す女性。戦時中に生と死の極限状況で人肉を口にしてしまった戦友を持つ男性は、戦友たちの法要のために、また動物を愛好する童話作家の男性は、自分の身代わりになって死んでくれた九官鳥への恩返しのために、このインドツアーに参加したのだった。インドで4年間の留学経験を持つ男性ツアーガイドが案内する旅程とともに、物語は場面を変えながら進んでいく。

彼らは、人間のすべてを飲み込み流してくれるガンジス河に、何かを期待してインドへ来たのだ。ガンジスは多様な悩みを受け止め、彼らを深く考えさせる。その答えはそれぞれ違った。妻の生まれ変わりに会えず虚しさを抱いた男性は、初めて真の孤独を知り、妻がかげがえのない存在だったことに気づく。童話作家は、買い求めた九官鳥をかつての身代わりの代わりに空へ放したことで、重い荷をおろす。戦友の悲惨な記憶に苦しむ男は、病いに倒れながらも、河に向かって阿弥陀経を唱える。探していた男と再会し、彼が河のほとりの火葬場で働いていることを知った女性は、彼との対話を通して、自分とはまったく異なる彼の生き方に、何かを感じとるのだった。

本書の主人公は、実はガンジス河ではないかと私は思う。この物語でガンジス河は、人がどんな宗教に属そうが、あるいは無宗教であろうとも、人々のもつ複雑な人生のすべてを受け止め流してくれる存在として描かれている。水は万物の根源として宇宙の生命世界を循環している。いつの時代も形をかえながら世界をぐるぐると流れ続けており、昔も今も水は不変なのだ。

その水は人と神の世界をも結ぶ。ガンジス河は人間のすべての罪を償い清めることができるかとされており、河のそばで死体を焼くと、その灰は河へ流される。それは来世でよりよく生き返ると考えられているからだ。本書ではガンジス河を「現世と来世をつないでいる」と表現している。現世と来世をつなぐ水へ流すことによって、結果として「転生」という考え方が生まれたのだろう。「生と死の循環」という思想は、四十九日以内で前世までの報いが定まり、次の生に生まれ変わるとされる仏教思想とも共通している点が興味深かった。

そして本書では、キリスト教のマリアと比べるような形で、インドの女神が描かれる。インドの女神は、生命の全体の動きを象徴しているという。私は女神という言葉を知ると、つい「優しいもの・母なるもの」を期待してしまう。だが、インドの女神は美しくない。キリスト教の女神マリアは清純で優雅で、母性の象徴であるが、インドの女神は恐ろしい姿で表現されることが多く、本書では、うす穢く暗い地下に置かれている。なかでも「チャムンダー」という墓場に住む女神は、病苦や死や飢えなど、インド人が味わわなければならなかった苦しみをすべて表している。醜く老いながらも、インド人と共にそれに耐えているのだ。聖母マリアとはあまりにも異なるが、チャムンダーもまた、インドの母なる神なのである。

日本に住む私は、深刻な貧困や飢えなどで苦しむことがほとんどない。そのせいか、「神」というと聖母マリアのような奇麗な女神を勝手に想像してしまう。しかしもし、私が耐え難い苦しみを受けたら、同じ境遇に立ってくれる神のほうに「救われる」と感じるだろう。奇麗な服を着た美しい聖母マリアに上から見下ろされたら、羨ましくなるだけだ。その姿に憎しみさえ抱いてしまうかもしれない。

だが、同じ境遇で苦しんでいる神ならば、共感してくれていると感じるだろう。もちろんマリアの清らかな姿を見て救われる人もいるから、それを否定しているわけではない。しかし人間は、「共感」によって救われることのほうが多いと私は思う。「あの人もあんなに大変なのに頑張っているのだから私も頑張ろう」、何度もそう思ったことがある。自分や相手だけが辛いわけではなく、苦しみは分かち合えるのだと考えると、気持ちも少しは楽になるのだ。インドの神はそうやってインド人を救ってきた。

ガンジス河も決して奇麗なわけではない。ミルクティー色の濁った河で、死体の灰を流したりもしている。だが、人々はあえてその河に身を浸すのだ。本書では「奇麗なことと聖なることとはこの国では違うんです。」と登場人物が言っている。私たち日本人は、「聖なるもの」と言ったらすぐ「きれいなもの」と勝手に想像してしまうだろう。だが、生きていくということは、きれいなことでもあり、汚いことでもある。それをすべて受け入れているのがガンジス河であり、インドの女神であり、それが「聖なるもの」だと思う。

著者の遠藤周作はキリスト教信者として知られている。彼はインドに行ったとき、この女神を見てきつと非常にショックを受けたであろう。しかし著者は、インドの女神やガンジス河を見た経験によって、宗教とはまた別の何かがあることに気づいたのではないだろうか。「善のなかにも悪がひそみ、悪のなかにも良いことが滞在している」という登場人物の考えは、キリスト教とはかけ離れた「混沌」のインドに立ったからこそ著者が実感できたものなのだろう。

遠藤周作 『深い河』 講談社

病から知った愛

ビジネス社会学科 1年

野村 菜月

私の祖父は、今の時代ではまだ若いとされる60代で早い死を迎えました。その妻である祖母は、闘病中の祖父の介護疲れから、うつ病を患いました。祖父が亡くなって10年以上が経ちましたが、症状は治まるどころか悪化していく一方でした。

本書の主人公・つぐみは、生まれながらにとっても体の弱い少女で、大変甘やかされて育ちます。そのため、つぐみの母、姉の陽子、従姉のまりあに対し、見事なまでの毒舌を吐き、いたずらをして困らせます。私はそんなつぐみを見て、祖母の事を思い出していました。

もちろん、祖母はつぐみのように命の危険があるほど病弱ではないし、つぐみも祖母のように誰かを亡くしたショックで体が弱くなった訳ではありません。ただ、祖母が大切な人を失ったショックから精神的にダメージを受け、自己嫌悪に沈んだり、気持ちが高揚して無理に暴れたりすることを繰り返すことと同様に、つぐみも死期が人より近いことを悟り、海を眺めたり夜の闇に感傷的になる一方で、許される範囲で存分に身内にあたっているという面が似ていると感じました。

人が病を患うと、うまく機能しなくなるのは身体だけではないのです。ただ、落ち込むにせよ、気が強くなるにせよ、いずれの場合にしろ人の中にある「自分に構ってほしい」という気持ちがそうさせているように思います。本書のつぐみは病室で、祖母は一時的に施設で暮らしていたときに、その症状が著しかったような気がします。私が見てきたご年配の方々の中では、早くにパートナーを失い、子どもたちも自立し、遠方に住んでいて身寄りがないという方々のほうが、元気な早い段階のうちから、諦めにもよく似た覚悟ができており、症状が穏やかなように思います。誰かがそばにいるかどうか、こんなにも人生を左右するのです。

まりあは、つぐみからどんなことを言われても、大好きだった亡くなったまりあの祖父からの手紙だと偽の手紙でからかわれてできえ、最終的にはつぐみを許してしまいます。それは、病気に対する同情からなどではなく、従姉は何があっても一生従姉のままなのだから頼られる存在でありたいという彼女なりの強い意志の表れでした。また、本書ではつぐみが「死」というキーワードを、内心は辛いでしょうが、表向きにはあまりにも軽々と、かえってすっきりするぐらい軽快に口にし、憎まれ口をたたくので、そのつぐみの愛嬌が、本のテーマを重たくし過ぎない効果が生まれていることに驚きました。

とある事情からボーイフレンドの犬を不良グループに殺され、1人仕返しを企て、体力を使い過ぎてしまったことで、一気に衰弱していくという急展開でした。私の祖母も、昔の臆病な愛犬が雷に驚いて逃げ出したとき、大変なショックを受け、いなくなった後しばらくは、まだそこに繋がれているかのように延々と語っていました。それだけ、犬も人と同じように、寄り添って生きていくことのできる価値ある命を秘めた存在であるということを、改めて実感しました。

仕返しの過程で体力を使い果たしたつぐみは、過去最悪の症状で、今まで治療で繋いできた命が、「今度こそだめかもしれない」と思わせるほど悪化します。何とか回復したものの、つぐみは焦ってまりあに遺言を発送してしまいます。その旨を伝えた電話の相変わらずの悪口っぷりとは裏腹に、遺言には、感謝の言葉もたくさん綴られていました。焦る気持ちがそうさせるのかは分かりませんが、まりあの普段からの願いが届いていて、つぐみがまりあを心から頼りにしていることが分かる、特別な文面となっていました。

人はなぜ、いざというときにならないと、本当に大切なものに気づくことができないのでしょうか。また、もし気づいていたとしても、なぜ始めのうちから、素直に、優しく丁寧に扱っていくことができないのでしょうか。

私個人の経験から言うならば、幼い頃に亡くなった私の祖父のことがあります。私が物心がついた頃には祖父は病床についており、管が繋がれて意識は朦朧としていました。そのため、私は声すら聞いた覚えがなく、ただ漠然としたままお見舞いに行っていました。しかし祖父が永遠の眠りにつき、その冷たくどしとした鈍く重い肌を触ったとき、「この人は、この世ではもう会えない私の大切なおじいちゃんだったんだ」と急にこみあげてきました。1回1回のお見舞いで、もっと記憶に留めておくべきことがあったはずだ、と後悔が残ります。

気づいたとしても優しく接することができないのは、「意地」と「照れ」に由来しているように思います。現在一人暮らしをしている私ですが、一人で大丈夫だよと示したいのか、こちらからは両親に電話をかけません。また、ふと「実家のほうではこんな体験はできないよなあ、ありがたい」と思うことがあっても、電話をしないので伝えたことはありませんでした。電話がかかってきても、恥ずかしさで反抗してばかりいる自分を反省しました。

何かしらの思いを抱えていても、病に倒れてからでは遅いのです。どちらかが話したり聞くことのできる能力を失ったり、視力や手足の自由を失うようなことや、相手が看病に必死で、聞く耳を持たなくなれば、何も伝わりません。また、つぐみのように、病人になってからしか分からない、ネガティブな思考や前向きに生きていこうとする心情を知ることができる、私にとって貴重な本との出逢いとなりました。

吉本ばなな 『TUGUMI』 中央公論社

佳作

そこの君、今こそ大いに悩もう

メディア表現学科 4年
高橋 優菜

「今の自分が読むべき1冊だ。」目白の100冊が書かれたプリントの中で目に留まった1冊であった。10月に入ったというのに就職活動が思うようにうまくいかなかったり、卒業論文のメ切があと、2か月しかなく途方に暮れていたり精神的に気が滅入っていた時に巡りあったのがこの本、「悩む力」であった。

本を読む以前は、悩みすぎてストレスが溜まってしまい、体調面だけでなく、精神面でもまいってしまっていた。しかし、だんだん悩みすぎてしまうと何について悩んでいるのかすらあやふやになってしまったり、ほんの些細なことにでも落ち込んでしまったりしていた。そして、悩んでいる自分のことが大嫌いになっていた。

この本に巡りあい読み進めるにつれて、悩むことが悪いことではないこと、その悩みも自分だけではなく、筆者や本に登場する過去の偉人達も同じことで悩み、つまづいていたことに気付かされた。

この本には「悩み」という言葉をキーワードに、序章から終章までの10分野に分かれている。「今を生きることへの悩み」から始まり、自分自身、金、愛、死や青春といったように目に見えるものから、見えないものまで幅広く取り上げている。1番の特徴は、筆者だけの経験もとに書いているのではなく、100年前に生きていた夏目漱石と、マックス・ウェーバーが書いた小説がたびたび本の中でヒントや例えに使われている。100年以上前に生きていた2人のことを取り上げることで読者に自分の悩みは現代の悩みだけではない、100年という月日を超えてまでも悩まれているということは、人間誰しもがつまづくべき悩みであると私たちに提示しているように感じられる。

本を読んでいくうちに新たに考えさせられたり、今後に生かせそうだなと思ったりしたところが2点あった。「働くということは自分として生きるために必要であること」と「悩むことがあったらまじめに悩みぬくこと」の2点である。

1つ目は、「働くということは、自分として生きるために必要であるということ」である。この文章は、6章何のために「働く」のかに書いている。この章を読んだときに、まさに就職活動真っ最中の自分自身にピッタリの章だと感じた。働くということはどんなことなのか、就職活動を始めて半年過ぎたが分からなくなっていた。しかし、ホームレスが役所から仕事をもらって嬉しかったことに、「ご苦労様」とたった6文字だが、「ねぎらい」の言葉を通りがかった人に言われただけで、涙ぐんでいたと書かれていた。そこから筆者は6章の終わりに働くということは「『自分が社会の中で

いきていい』という実感を持つためには、やはり働くしかないのです」と述べている。この言葉に強く賛同した。この言葉から、私は社会に役立つ、つまり、人の役立つことだと解釈した。1年ほど前、駅でたくさんの荷物を抱えてホームに向かう階段を上っているおばあさんがいた。そのおばあさんの横を人が通り過ぎるだけで誰も手伝おうとはしなかった。私は放っておかず、おばあさんの横に駆け寄って物を持って一緒に階段を上った。階段を登りきったときにおばあさんは満面の笑みを浮かべて、「本当にありがとう。助かった」と言ってくれた。この時に、人助けは悪いことではないと感じられ、有意義な気持ちで1日を過ごすことができた。仕事に関しても、自分が入りたいと自分だけの意思を企業にアピールするのではなく、相手の目線にたって「メリット」を話すべきだと先生に言われたことを思い出した。少しではあるが、相手の目線にたって行動するように意識している。そうすることによって、客観的に自分が社会の中での立場を把握し、目標を持ったり、社会の中で個性を出していったりするにはどのような行動をとるべきかが分かるようになるからだ。

2つ目は「悩むことがあったらまじめに悩みぬくこと」である。これは、本書の中の8章なぜ死んではいけないかの中に「悩むこと大いにけっこうで、確信できるまで大いに悩んだらいいのです。中途半端にしないで、まじめに悩みぬく。そこに、その人なりの何らかの解答があると私は信じています。」と筆者は述べている。この部分を読む前、最初の部分に書いたように悩むということは良くないこと、人間の中で負の部分であり、人に見せるべきものではないと思っていた。しかし、この文章を読んで、私は、悩むこと自体は悪いことではない。中途半端に悩みすぎるのが悪いという考えが変わった。精神面が弱く、就職活動について悩んだ1週間後に卒業論文について悩んだり、そのまた1週間後にまた就職活動に悩んだりと同じような悩みを繰り返していた。これは今になってみると、中途半端に悩んでいたんだなって思った。そのことに気づいてからは、1つのことを深く考えて結論を出したら、そのことについて考えないようにした。例えば、就職活動について悩んで、まじめに悩み抜くと決めてから、自分の中で、人と比べたくなることはたくさんあるけれど、「自分の人生なんだから、人と比べてもしょうがない」という解答を出してからは、その解答を軸に考えていくことにした。その結果、以前のようにくよくよすることが少なくなった。

「働くということは自分として生きるためには働くこと」と「悩むことがあったらまじめに悩みぬくこと」の2点から、社会の中で生きていくためには、相手の立場に立ってものを考え、そのなかで、まじめに悩み自分自身の中で軸を決め、解答をだすこと。そしてその都度、新たに自分を見つけ出したいと思った。

この本を通して、悩むことは恥ではなく、時代や性別を超えて生きている限り付きまとうものだと感じだ。そして、その悩みをどのように悩むかによって今後の人生が左右されたり、まるっきり変わったりしてしまい、別物になってしまう。日常生活の中で、本を読んだり、人から話を聞いたりすることで、よく「中途半端にしないほうがいいよ」という言葉を耳にする。悩みに対しても同じことで中途半端に終わらせて

しまふと何度も同じことで悩んでしまふ。そのようなことを防ぐ対策として、「大いに悩み、自分の中で解答を出す」ということを筆者は述べている。この言葉は今後、社会人として生きていくうえで、大切なことであり、胸にとどめていくべきことだと学んだ。だからこそ、「そこの君、今こそ大いに悩もう。」

姜尚中 『悩む力』 集英社

佳作

桐島が与える影響と変化

メディア表現学科 4年

櫻井 舞

私がこの作品と出会ったのは2012年に公開された映画を見たのがきっかけである。映画を見ようと思ったきっかけはタイトル名がユニークで面白そうだと率直に思ったからであり、その当時は、既に原作が出版されていることは知らなかった。

この作品は、男子バレーボール部のキャプテンだった桐島が部活をやめることをきっかけに、同級生の日常に些細な変化が起こる。バレー部のキャプテンであり、リベロを務める桐島が部活をやめたことで、部員は大きなショックを受ける。また、桐島の彼女でありながら、何も知らされず、メールや電話などをスルーされて連絡が途絶えてしまう梨紗も動揺を隠しきれない。さらには、桐島の帰りを、バスケをしながら待っていた野球部の幽霊部員で親友でもある菊池は、桐島が部活をやめることを自分に相談してくれなかったことにショックを受ける。

桐島が部活をやめることで、直接の関係者以外にもさらなる波紋を広げていく。桐島の代わりにレギュラー入りした風助は、背は低いがバレーが好きで地道に練習し、まじめに取り組んできたのだが、いざ試合に出場すると桐島との力の差は歴然であった。桐島不在にイライラした部員からひどく叱られ、風助は「一生懸命やってもこれが限界なんだ」と自分の不甲斐なさを認めてしまう。そんな風助の思いが新たな波紋を呼ぶ。それが宮部実果である。実果は自分にコンプレックスを抱いており、風助の限界発言に共感を覚え、実果自身も自分の生き方を深く見つめるようになる。

桐島の影響はとどまることなく広がり、桐島の帰りをバスケをして待っていた菊池や竜汰は「桐島がいなければバスケをして待つ意味がない」とバスケをやめる。これは、竜汰

のことが好きで、いつも彼のバスケをしている姿を見るために屋上でサックスの練習をする吹奏楽部の沢島亜矢にも大きな影響を与えた。それは竜汰の姿を見ることができなくなるからだ。彼の姿を見ようと亜矢はさまざまところに練習場所を移すが、それもまた新たな波紋を呼ぶ。それは映画部所属の前田が現在打ち込んでいる映画の撮影場の行く先々で亜矢と出会い、彼女に撮影場所を譲ってほしいと懇願することになってしまう。

このように一人男子生徒が部活をやめるという出来事を発端に、さまざまところで問題や変化が起こっていくのである。

私がこの作品を読んで自分の高校生活を思い出した。私は高校時代、帰宅部で授業を受けて放課後は友達とカラオケや買い物などいろんなことをして遊んでいた。作品

の彼らと同じ17歳の頃は将来のことも考えずただひたすら遊んでいた。そして、この作品で最も共感できたのは野球部の幽霊部員である菊池宏樹の話であった。「俺たちはまだ17歳で、これからなんでもやりたいことができる、希望も夢もなんでも持っている、なんて言われるけど本当は違う。これからなんでも手に入れられるの可能性のあるてのひらがあるってだけで、今は空っぽなんだ」という言葉が宏樹の話の中にあっただ。17歳の時の私も全く同じ状況であった。17歳の高校2年生の時の進路希望調査を記入するとき、やりたいことなにもなく、白紙で出したからだ。中学・高校に進学するときはまだまだ悩む時間はあるからと思い軽い気持ちで進学先を決めていたが、進路希望調査を記入するとき始めて自分はやりたいことすら明確にせず遊んでいて空っぽな人間なんだと自覚したことは今でも鮮明に覚えており、今回この作品を読んで自分と宏樹はどこか似ているように思えた。

しかし、宏樹と私には少し異なる部分があった。この本の最後には、宏樹は今まで逃げ続けてきた野球部に戻る決断をする。宏樹は桐島が部下をやめたことではじめはショックをうけたものの、周りが動揺している中で自分を見つめ直していた。クラスの中で下位グループと位置づけられている人が「ダサイ」と周りに言われているのを見ても本当にかっこわるいのは立ち向かうことも逃げることもできない自分なのではないかと考えていた。変わりたい、今のかっこわるい自分から抜け出したい。そう思って宏樹は最終的に野球部に戻っていくのである。

その一方で、私は現在22歳の大学4年生になった今でも17歳の頃と同じように悩んでいる。高校3年生の時に先生と相談してなんとかやりたいことを明確にして大学進学を決意し、今年7月には就職先も無事決まったのだが、今でもこれでよかったのかと不安になることがある。まだ、他にやりたいことがあるのではないかと考えることが時々あり、そこが私と宏樹の違いである。

しかし、この作品を読んで自分にもっと自信をもつべきなのだと強く感じた。自分が数ある企業の中から選んだ企業なのだから、自分らしく働けるように企業理念や自分が今後企業でどのようにありたいかをきちんと考えていき、今やるべきことをこなしていく必要があると実感した。宏樹のように何か目標に向かって行動できる人はかっこいいと感じた。私も今から目標をしっかりと立てて行動し、立派な社会人になれるよう精一杯努力していきたいと思った。

朝井 リョウ 『桐島、部活やめるってよ』 集英社

佳作

夢を叶えるための秘訣とは…

日本語・日本語教育学科 3年

吉村 友里乃

私が当書と出会ったのは、中学生の時だった。当時、私が当書を読んだ理由は、テレビドラマ化されるほどの話題作で、とても人気があったため読んでみたという、ただそんな理由だった。

当書は、主人公の男性とゾウのような姿をしたインドの神様ガネーシャが奇妙な共同生活を送りながら、自分を変えるため日々奮闘していく物語である。主人公の男性は平凡な会社員だ。ある日、会社の先輩に誘われ、有名な実業家の誕生日会に行くことになる。そこで主人公の男性が見たものは、高級そうな家具や成功をしてキラキラと輝いている人びと。自分たちがいる世界とは全く異なる華やかな世界だった。帰宅後、誕生日会で見た光景から自分との格差を感じ、インドの神様のガネーシャ像に向かい「自分も変わりたい！」と泣きつき、そのまま眠ってしまう。翌朝目が覚めると、ガネーシャが本物の神様として現れる。インドの神様なのに関西弁を話し、神様らしからぬ振る舞いに最初は戸惑う男性だが、ガネーシャから与えられる課題をクリアしていくことで成長していく。

私が当書を読んで印象に残ったことが二つある。まず一つ目は、主人公の男性の「変わりたい」という強い思いである。男性は先輩と訪れた実業家の誕生日パーティーで目にした、華やかな世界や人々と自分の姿を比較し、劣等感を抱く。「自分も彼らのようになりたい。変わりたい。」と願うが、今までずっと変わることが出来なかった。その主人公の姿と自分の姿が非常に重なった。私も度々、自分の欠点を改善しようと思ひ、最初は意気込むのだが、いつも三日坊主で終わってしまっていた。なぜ、人は変わることが出来ないのか。当書の文中でガネーシャは主人公の男性に向かい、人が変わりたいくても変われない最も大きな原因は「人間は意識を変えることはできない」からだと言っている。意識を変えるというのは、例えば、「今日から変わる。」や「一カ月間で本を五冊読む。」と目標を設定し、きちんと実行し達成することである。だが、人間の意志とはとても弱いもので、目標に向かい頑張っている自分を想像するだけになってしまうことが多いのである。なぜなら、未来の自分に期待し想像することは楽だからだ。そして、本当に目標を成し遂げるには、「具体的な行動に移すこと」と「決めたことを続けるための環境を作ること」である。私はこれらのことを学び、今までの自分の経験を振り返ると、ただ、意識を変えようとしただけで、実際に目標達成に向け、具体的に行動し、何かを制限したりなど、環境を整えて取り組んだことは、大体成功していると思う。一方、どんなに強い思いや希望でも、意識だけでは成

功出来なかった。自分の姿や体験と重なり、共感出来たことが、印象に残った理由である。

二つ目は、「毎日、感謝する」という気持ちである。これは、ガネーシャが主人公に与えた課題の一つだ。お金や名声、地位、名誉などは、人は自分で全て手に入れたかのように感じてしまうことがある。しかし、それは全て周りの人々のおかげであるということを忘れてはいけない。自分自身も努力したかもしれないが、自分にお金や名声を与えてくれるのは、周りの人々である。感謝は、人生において非常に大切なものであるが、時に忘れてしまったり、いい加減にしてしまうことも多い。特に、自分がいろいろなことに対して上手くいっている時や本当にお世話になっているはずの保護者に対して感謝できていないと思う。これからはさらに、感謝の気持ちを大切に生きていきたい。

私は当書を通じて、多くのことを学び、改めて自分の夢に向かって頑張ろうという気持ちになることができた。当書の文中には、成功へと繋がる鍵として、アイザック・ニュートンなどの歴史上の人物やイチローなどの現代の偉人たちのエピソードが添えられている。偉人たちはどのような人物なのか、一体どのようにして偉人と呼ばれるようになったのか知ることができる。これらのことをただつらつらと記しても、読者はまるで歴史の授業のように感じてしまいそうだが、当書のポイントはここにある。物語に登場する偉人たちの話は、インドの神様ガネーシャの会話の中にさらっと、かつユニークに描かれている。さらに、ガネーシャはインドの神様なのだが、関西弁を話すため、さらにおもしろさを引き出している。どのようなことをしたのかわからない偉人の話でも、「シャネルちゃん知ったはりますか？」のように、まるで自分の友達の話しをしているかのように話すのがとてもおもしろい。

当書を読むのは二回目なのだが、またこの本を読んで本当によかった。私はずっと海外で日本語教師になることが夢で、今までずっとそれしか考えられなかった。しかし、最近はなかなか思ったように上手くいかないことも多く、「本当にこれでいいのだろうか。」と将来に対して不安を抱くことが多かった。しかし、当書を読み終わり、再び自分に問いかけてみると、「やっぱり自分のしたいことはこれだ！」と前向きな気持ちになることが出来た。当書は幅広い層の読者に楽しんでもらえるが、将来に不安を抱いていたり、本当は自分のしたいことがわかっているけれど、勇気が出せずにいる人には是非読んでもらい、多くの人々に夢を諦めずに叶えて欲しい。

水野敬也 『夢をかなえるゾウ』 飛鳥新社

平成28年度図書委員

| | |
|-------------------------|--------|
| 心理カウンセリング学科 (心理学研究科) | 高橋 稔 |
| 人間福祉学科 (生涯福祉研究科) | 西澤 利朗 |
| 子ども学科 | 山中 智省 |
| 児童教育学科 | 石田 好広 |
| 社会情報学科 | 張 元宗 |
| メディア表現学科 | 小林 頼子 |
| 地域社会学科 (国際交流研究科) | 石井 貫太郎 |
| 経営学科 (経営学研究科) | 井上 綾野 |
| 英米語学科 (言語文化研究科) | 薬師 京子 |
| 中国語学科 | 胎中 千鶴 |
| 韓国語学科 | 李 ソラ |
| 日本語・日本語教育学科 | 金澤 裕之 |
| リハビリテーション学研究科 | 今富 摂子 |
| 生活科学科 | 田中 あゆみ |
| 製菓学科 | 庄田 美保 |
| ビジネス社会学科 | 鈴木 健之 |
| 新宿図書館長 | 沢崎 達夫 |

2017年2月8日発行
編集・発行 目白大学新宿図書館